

囲碁界、卓球界 ≠ 建築界



矢作和久

囲碁棋士の今年の勝ち星ランキングが、新聞にでていました。1位は18勝の井山裕太名人、2位は17勝の村川大介七段、3位は16勝の結城聡天元。結城天元は昨年の最多勝です。村川七段の健闘が光ります。平成2年生まれ。小学生でプロ棋士になった天才です。ここにきて、好成績が目立ちます。結城天元もそうですが、韓国棋界のウォチャーで知られています。そのために韓国語を覚えたということです。それが好結果をもたらしているように思えます。

残念ながら、ここ数年、囲碁の本国日本は韓国、中国に後れをとっています。国際棋戦で優勝する棋士は出ていません。新手や新構想も韓国、中国、特に韓国で考えられたものが目立ちます。新情報が韓国棋界に充満しているようです。したがって、ここにアプローチして、情報入手を図るのは、有効な方法だと思いますし、プロ棋士として当然の姿勢でしょう。

同じ日に、卓球のロンドンオリンピック代表が決まったという記事が出ていました。女子では、石川佳純選手が選ばれました。石川選手は、今後の目標の一つとして、中国語の習得を挙げ、中国語ができるようになることで、中国の選手やコーチから、もっと沢山のことを教えてもらえると語ったようです。卓球の技術用語として日本語にない表現が中国卓球界にはあると言っている点が興味を引きました。中国の方が、技術が上です。日本は卓球王国だったことがあります。何人もの世界チャンピオンを出しています。しかし、それは過去の過去になりました。現在では、卓球に関する情報取得には、中国卓球界への参加が不可欠なのだと思います。

さて、建築の分野はどうでしょうか。「現世界チャンピオン」のような気分ではないでしょうか。かつて、なんでもかんでも、アメリカに学んだ時代がありました。会社の書架には、アメリカの雑誌が何冊も入っていました。「建築は経験工学」と言われます。「アメリカの経験」を学んでいた訳です。したがって、英語は不可欠でした。しかし、それは半世紀も前の話です。今は違います。「他国の経験」からではなく、「自国の経験」から十分に学ぶことができます。しかも、日本

語で学べます。

「経験」は、「量」と「質」を問題にする必要があります。「量」は基本的には建設工事量に比例します。更にその量が数十年の単位で続く必要があります。景気が低迷しているとはいえ、日本の建築界はこの条件を満たしています。強いて問題指摘をすれなら、国内偏重で海外工事の比率が低いことでしょうか。「質」の点でも問題を感じません。高度の技術を必要とすれば建物が多く建てられ、質の高い経験を積むことができます。外国語を、例えば中国語や韓国語を習得してまで、技術情報を入手しようとは考えないのでしょうか。恵まれた状況にあります。全盛時の日本の囲碁界、卓球界も同じように考えていたかもしれません。現在の状況など思いも及ばなかったと思います。建築は囲碁界や卓球界とは違うのでしょうか。政府調達に影響するTPPは気になりますが、私の結論は表題です。

建築は「良いものを、安く、早く作る」競争です。現時点でも、日本国内という土俵に限定すれば日本企業優位ですが、残念ながら海外ではそうとは言えません。この先ずっと、日本国内に限定すれば、外国企業に後れをとることはないと言い切れるのでしょうか。外国の建設会社が競争に勝って日本国内で建物を建てるなどということはありえないでしょうか。

東日本大震災が発生して2カ月になります。これは1万人以上の人命を奪った激しい「経験」です。この経験に学ばなくては、亡くなった方々に申し訳ありません。地震に対応する技術は他国の真似できない日本の卓越した技術で、法規制も含めて他国の追随を許さない社会システムでもあります。大地震があることが、外国建設業の日本参入を困難にしています。「神国日本」は「震国日本」です。価格競争だけでは日本参入はできません。このことを認識し、地震に対応するシステムを高度化していく必要があります。この震災は、日本の建築技術者に膨大な「学ぶ」情報を提供してくれました。「神は乗り越えられない試練は与えない」、テレビドラマのセリフです。立派に乗り越え、貴重な経験として蓄積しなければなりません。